

透明な想い（改訂版） 前編

きつかけは、それが何だったのかも忘れてしまうくらい些細な事だった。なのに、云い争いは、次第に度を越して行き、何方も一歩も譲らなかつた為、最悪な結末になってしまった。

「そう。なら、私はもう知らない。もう此処へも来ないよ。さよなら」

ほんの少しの怒りと悲しみの表情を浮かべ、太宰は淡々とそう云った。心の中は、深い悲しみに支配され乍ら……。

「ああ、そうしてくれ!! その方が、清々すらあ!! 二度と来んな!!」

一時の感情に任せてそう吐き捨てた中也は、太宰に冷たく背を向けた。太宰は一度ゆつくり瞬きをすると、中也の後ろ姿を少し見つめ、意を決した様に踵を返し、部屋を出て行つた。ガチャリとドアが閉まつた音が、静かになった部屋に虚しく響いた。

二週間後、珍しく、朝から武裝探偵社に出社していた太宰は、国木田をからかなぐ、適当に書類に目を通していた。

国木田君で遊んでも、気が晴れない。

話まらないなあ……。

太宰はそんな事をぼんやりと考えていた。溜め込んだ書類を纏めると国木田に云われ、仕方なく朝からここにいる太宰は、外に出る事も許されずに退屈していた。そんな時、太宰の携帯が音を立てた。その発信元の人物の名を見て、太宰は目を細めた。

「はい」

少し警戒したような声で電話に出る太宰。

「久ひさしいのう。鏡花は息災か？」

その問いに、ちらと鏡花の方に視線だけを向けると、彼女は、敦と一緒に真剣に何かを調べている様子だった。

「ご心配頂かなくとも、元気に仕事を熟していますよ。……一寸、待って下さい」

そう云うと、太宰は席を立った。

「おい、太宰、何処へ行く？」

「御免ね国木田君、五分で戻るから」

太宰は苦笑して自分の携帯電話を指差しながら国木田を見ると、直ぐ表情を戻し、ドアの方へと向かった。そして、ドアを開け、廊下へ出て少し歩くと、電話を続けた。

「すみません、お待たせしてしまつて。……それで、用件は何です？ 鏡花ちゃんの様子が知りたかっただけではないのでしょうか、あね姐さん？」

電話の相手はポートマフィア幹部の尾崎紅葉だった。

「……否、ちと、世間話でしようかと思うてのう。付き合ってくれるかえ？」

「話の内容にもよりますが……」

太宰は紅葉の真意が解らず、苦笑混じりに答えた。

「私には、鏡花以外にもう一人、昔から、案じておる奴がおつて
のう。其奴が、十日程前に事故に遭うてな、少々難儀しておるの
じゃ」

紅葉の声色は、至つて明るい。何時もと然程変わらない口調で
話してはいるが、ほんの少し気落ちしているようにも感じ取れる。

「事故、ですか？」

その人物が誰だか直ぐに察した太宰は、心中穏やかではいられ
なかつた。然し、それを隠すように、冷静に言葉を発した。

「組織の人間が利用する病院は、知っておろう？ 其処の地下の
隔離部屋に、今、其奴は入れられておる。二十四時間、監視付き
でな」

「……何故、そんな事を私に？」

「何、只の世間話じゃ。身も心も傷ついた彼奴を、ちと不憫に思
うてのう。只、それだけじゃ」

それだけではないだろうという事は、太宰には、解っていた。

紅葉が自分に連絡して来るなど、今まで一度もなかつたのだから、
それだけ、事は深刻なのだろうと推測できた。それに、隔離部屋
に、というのも気になっていた。

「姐さん、私は、もう関係ありませんよ。その病院の地下にも、
私は、もう立ち入る事は出来ない」

「私は来いなどと申してはおらぬ。ただ話しかつただけじゃ」
「……そうですか。では」

電話を切り、深いため息を吐く太宰。

中也、一体、何があつたんだい？

心の中でそう問いかける太宰。

答える相手は、目の前に居やしないのに。